

教室3 情報発信プロジェクト「絵と文字で伝える地域のストーリーづくり」 第3回レポート

教室3は、情報発信プロジェクト「絵と文字で伝える地域のストーリーづくり」。地域の面白いネタを集めたかるたを作ります。

まずは前回のフィールドワークのおさらい。「見つけたもの」「出会ったひと」「聞こえたおと」「考えたこと」を書き込んだシートの共有から始まりました。2班に分かれてのフィールドワークだったので、班によっては聞いた話や出会った人など違いもあったようですが、文字だけでなく絵もたくさん描き込まれたシートを見て「確かにそうだったね!」と、皆さん2週間前の記憶が蘇ってきたようでした。



つぎに、宿題になっていた「読み札」を一人ずつ発表していきました。フィールドワークで得た知識や心に残ったことが、読み札に表れていました。難しいと思われていた「ん」ですが、「ん～、〇〇」にすると何でもいけるという思わぬ汎用性を発見。では、「を」はどうでしょうね？

今日の授業は、残りの文字の読み札とその説明文を考える作業です。まずは2班に分かれて、文字を書いたくじと地区を書いたくじを引きました。地区のくじは長浜・御畳瀬・浦戸の地域性が偏らないようにするためです。文字と地区のくじを並べて悩む受講生たち。「この文字が欲しい、交換して。」「この文字難しい、なんかいいネタない？」など、班の中で会話が生まれます。一人では難しくても、みんなで一緒に考えることができるのが、みませ楽舎の良さでもあります。



読み札は、なるべく土佐弁を使うことにしているのですが、ここで高知県民なら誰もが知っている「びんび（「魚」の幼児言葉）」が方言だと判明。「輪抜け様」も高知県だけの呼び方なのだとか。県外出身の受講生に教えてもらって分かったことでしたが、違う目線で見ると新しい発見に繋がるのですね。当たり前だと思っていたことが、違う地域から見ると特別ってことが、高知県にも長浜・御畳瀬・浦戸地域にもたくさんあるんだなと思いました。その面白さがるたで伝えられるといいですね。



受講生はスマホや土佐弁辞書などを見ながら、当たった文字で始まる土佐弁や、場面にあった土佐弁を探していました。

読み札を考えた後は取り札の絵を考えます。講師から、絵を描く時の考え方についてお話がありました。読み札の例示をひとつ挙げて、「この読み札にはどんな絵が欲しいですか？」「この人の表情はどんなのが良いと思いますか？」「他にどんな表現をすれば伝わりますか？」と受講生に問いかけ、受講生の答えをもとに講師のお二人が絵を描いていきます。「読み札も取り札も、自分だけで考える必要はないので、班のみんなで話しながら楽しく作っていきましょう。」とのことでした。



今後のスケジュールは、次回の授業で読み札と取り札を完成させ、サンプル品を作成。その次の授業で実際にサンプル品を見て、完成品に向けた修正をするとともに、かるたの活用方法なども考えていく予定です。